

デュニーにおける「成長の哲学」の形成と展開-実験的探求と創造的知性-

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-08-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神藤, 佳奈 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/17482 |

デューイにおける「成長の哲学」の形成と展開

—実験的探求と創造的知性—

学位請求者 臨床人間学専攻
神 藤 佳 奈

内 容 の 要 旨

1. 本研究の問題意識と目的

デューイ（John Dewey, 1859-1952）の生涯のなかで貫かれる問題意識のひとつに、人間が生活するなかで、様々なもの事や問題をどのように認識し、それにどう働きかけていくか、という問題がある。それについてデューイは、「成長」という考えを展開した。

デューイの「成長」という考えは、経験を不断に再構築していくことであり、それは「習慣」を再構築していくこと、またその再構築のプロセスとしての「探求」の総体が「成長」であると示される。それと同時に、ここでは「経験」や「知性」、「善」や「目的」といった考えが、デューイの思想的枠組みとしての「成長」を支える諸概念となる。つまり「成長」は、それらの諸概念を貫く中心線をなしている、ということができる。

さらに「成長」は、デューイの問題意識の変遷のもとに、初期から後期へと彼の問題意識の発展にともなって、「成長」も段階的に発展してゆき、デューイ思想を最も良く表すひとつの側面であるといえる。つまり、デューイの「成長」の形成と展開を考察することは、デューイ思想の史的展開を考察することに他ならない。そこで、本研究では「成長」という考えを中心として展開されるデューイの考えを「成長の哲学」として捉える。

したがって本研究は、デューイの「成長」を中心的概念とすることで、「成長」という考えが発展する過程と、デューイの思想的発展の相互作用に着目し、デューイ思想を「成長の哲学」として再構築することを目的とする。

そうしたデューイの「成長」はこれまで、教育思想・

教育哲学的側面と、哲学・思想的側面に、大きく二分されてきた傾向にある。そのどちらにおいても「成長」は、最も重要で鍵となる概念とされてきたのであるが、デューイの成長概念の意味は、必ずしも明確にされてこなかった。つまり、デューイにおける「成長」が具体的に何を意味し、それがどのようなデューイの問題意識に基づき、展開されたものなのか。そしてそれは、彼の生涯全体にわたる思想的展開のなかでどのように位置づけられていくか、といった問題の全貌は、いまだ十分に明らかにされていない課題である。

そうした問題に関して本研究では、彼の哲学的課題や、彼が実際に取組んだ実践や出来事に基づいて、デューイの問題意識の発展を追うことで、「成長」という考えを軸に彼の思想が展開していく過程を考察することとした。

問題を考察するにあたって、研究状況を踏まえうえで、次の3つの視点を設定した。1) 初期デューイの哲学的課題を明らかにし、2) その発展として中期デューイが取り組むシカゴ実験学校（1896-1904）、日本と中国旅行（1919-1921）を取り上げ、3) それらをくぐり抜けてきたデューイ思想が、後期において「成長の哲学」として結実していく過程を描く。

2. 本研究の構成ならびに各章の要約

本研究は、3部構成をとり全5章からなる。各部は上に示した3つの研究視点に対応している。

第1部：「デューイにおける経験、習慣、探求：行為の理論へ」では、第1章において、(1) 初期デューイの問題意識を考察するため、彼が身をおいていた知的環境をジョンズ・ホプキンス大学の大学記録等から明らかにし、

初期デューイの哲学的課題を、デューイの手紙や、当時の論考等から検討した。そこから彼の問題関心は、初期からすでに「知識の過程」を考察することにあり、それはカントの再構築から始まっていることを示した。

(2) 初期デューイにおけるカントの再構築の変遷を「心理学的観点 (“Psychological Standpoint”）」(1886年1月)、「哲学的方法としての心理学 (“Psychology as Philosophic Method”）」(1886年4月)、1890年「“自己”という用語に関する最近の考えについて (“On Some Current Conceptions of the Term ‘Self’”）」より考察した。特に1890年論文において、「自己」と「自己意識」を明確に区別し、活動としての「自己」を見出していくことが、デューイを行為の理論へと導くメルクマールになるという知見を得た。

(3) そして初期から中期への重要な足掛かりとして、行為の理論が展開される様子を、「心理学における反射弧の概念 (“The Reflex Arc Concept in Psychology”）」(1896)より検証した。初期から中期へ移行するデューイの思想展開において、古い経験を新しい経験へと再構築していく活動としての「自己」を見出して以降、デューイの思想は、行為の理論へと展開されてゆく。

したがって第2章では、デューイの「経験の再構築」を構成する理論的枠組みを描いたうえで、「経験の再構築」が行われるプロセスを、「習慣」と「探求」の論理的内容を描いたうえで考察した。中期で本格的に展開される行為の理論として「経験の再構築」があり、それを支える考えとして「習慣」があること、さらに「経験の再構築」は、「探求」という時間的プロセスを伴って、「習慣」を再構築していくことであることを示した。

第2部：「デューイの実践」では、「成長」を展開していくのにあたって、大きなターニングポイントとみなすことのできる、デューイのシカゴ大学での実験学校と、第一次世界大戦後の日本と中国旅行を、それぞれ第3章、第4章とし、それらにおいて、デューイが初期の哲学的課題から掴んだ考えが、実践的に考察され、さらに再構築を通して、展開されていく様子を考察した。

第3章では、デューイがシカゴ大学に在任中に開設したシカゴ実験学校における実践と、デューイの子どもの成長観を、以下の観点より検討した。

(1) 世紀転換期のシカゴの状況と教育をめぐる問題を、当時のシカゴ市の教育委員会の統計などから素描し、当時の公立学校で行われていた教育が、時代の変化に追い付いていない状況であったことを示した。そしてそうし

た時代や社会の状況に適していない教育を、変えていく必要があると訴えたデューイが、どのように学校や教育があるべきかを構想したかを明らかにした。

(2) 教育を変革していくにあたってデューイは、まず大学において、「教育学」を経験科学として位置づける必要性を訴えたこと、さらにそれには実験学校が必要だと訴えたことを示し、シカゴ大学の哲学部から教育学部が拡張し、独立していく様子を当時のシカゴ大学の年次記録等から考察した。

(3)・(4) デューイが開設した実験学校について、具体的な組織的内容を検討し、どのような授業を行っていたのかを検討した。実験学校開校にあたってのコンセプト、生徒数や教師数、学校組織といった基本的組織の構成、そこで行われていたカリキュラムを、シカゴ大学のスペシャルコレクションにある実験学校の教師による実践記録や各報告書等から示した。

(5) 同様の資料に基づいて、実験学校でのカリキュラムを編成する骨格となっていた、子どもの成長観を詳察した。そもそも実験学校の大きな目的のひとつは、どのような興味・関心のもと、子どもが知的に成長・発達するのかを、教師たちが詳細に観察し、実践的に試案していくことであった。したがって当節では、教師やデューイの観察・考察に基づいた、実験学校のカリキュラムの背景にある子どもの成長観を、実験学校の教師たちの報告書や、デューイの論文に基づいて示した。

第4章では、1919年から1921年にわたって行われたデューイの日本と中国旅行をとりあげた。

(1) 第1節ではデューイが両国で行った講演の主眼である『哲学の再構築 (*Reconstruction of Philosophy*, 1920)』の概要と、そこでのデューイの主張を明らかにした。

(2) デューイの日本訪問での講演と、それに対する当時の知識人の反応を考察した。具体的には、まずデューイが訪日する以前に遡り、日本にデューイ思想やプラグマティズムが紹介され、当時どのように受け止められていたのかを考察したうえで、1919年のデューイの訪日におけるデューイの東京帝国大学での公開講義を、当時の知識人たちがどのように受け止めたのかを、当時の資料より検討した。

(3) 次にデューイの中国訪問を取り上げた。具体的には中国でのデューイの講演と、それへの聴衆の反応を示したうえで、当時の中国における知識人として特に胡適の言説に着目し、中国におけるデューイ受容を検討した。そして、最後にデューイの日本と中国旅行に関する、両国の違いが物語るのは、デューイが『哲学の再構築』

において問題にしたことと無関係ではないことを指摘した。第一次世界大戦や、そうした日本と中国旅行を経て、彼の考えは、より「成長」を社会的な価値としての善へ向かうものとして展開されていくようになる。

第3部：「成長の哲学としてのデューイ思想」では、これまで考察してきたデューイの思想や実践を、「成長」の概念を軸に、初期、中期、後期を通じてどのように展開されてきたかを考察し、それらの全体を「成長の哲学」と捉えられることを示した。

第5章では、(1) 初期～中期における「成長」に関する概念の変遷を取り上げた。第一に、デューイが最もまとまったものとして「成長」の考えを展開した『民主主義と教育 (*Democracy and Education*, 1916)』における「成長」の概念を描き、そのうえで、そこで示された「経験の再構築」を意味する「経験の意味の豊富化」と「未来を方向づける能力の拡大」という考えは、1886年「魂と肉体 (“Soul and Body”）」、1887年「観念化としての知識 (“Knowledge as Idealization”）」において既に表れていることを明らかにした。そこから、「成長」に関する本源的問題意識は、第1章で示した初期のデューイの哲学的課題から展開するものであることを示した。

(2) 中期から後期におけるデューイの「成長」の展開について考察した。中期において一次大戦や日本・中国旅行を経て、「成長」は、より社会的な価値や意味のなかで考察されることとなる。それはすなわち、成長はどこへ向かうのかという問題を、「善」や、道徳的価値へ向かうものとして捉えていくことであるという知見を得た。

(3) 「実験的探求」と「創造的知性」の関係に着目し、今までデューイが初期から展開してきた哲学的課題が、後期では「探求」と「知性」の関係のなかで展開されることを示した。そこにおいて「不確実性」と「連続性」といったデューイの考えが根底にあることを示した。

そして以上のように、その変遷を追うことのできる「成長」を軸としたデューイの考えは、初期の哲学的課題から一貫して「未知のもの」への取り組みであり、「創造的知性」に導かれた「実験的探求」を通じて、「知識」や、「経験」が、人間が社会のなかで生活するなかで形成され、再構築されるということである。それは、人間の生活そのものであり、未知のものを既知のものへと変えていく不断な活動に他ならないこと、そうしたデューイが生涯にわたって展開してきた問題は、「成長の哲学」として捉えられると結論づけた。